記憶に残る 数々の個性派選手

史上に名を残すテクニシャンの中道善博

あだ名の付いた差し屋たち

記録には残らなくても、ファンに強烈な印象を残した『記憶に残る』個性派選手もまた、後世に語り継いでいきたい。表に掲載した選手以外にも、何人か紹介していこう。一応引退した選手を中心とするが、現役でも名を残しておきたい選手はここに記しておく。

まずはひとつの戦法を極めて、観客席を唸らせてきた面々から――。

「インの鬼」で名を馳せた記念級といえば、柴田稔・倉重宏明・野口徳三ら。記念だけでなく、一般戦でも物部勝や加藤尚明らは、徹底したイン取りで有名だった。現役では関忠志・鈴木幸夫・西島義則らの名が挙がるだろうが、枠なり時代になって2・3コースも増えている。

逆に大外専門という選手も、今に比べれば昭和の時代には多かった。その代表が向義行で、大外一本で1500勝は驚異的だし、75年の津施設改善記念も制している。その後に現れたのが吉岡修・小川晃司で、さらに現在の枠なり時代にセンセーションを起こしたのが阿波勝哉である。

まくりは、創設間もない頃から長らく関東の選手の得意技だったが、80年代に一世を風靡したのが津田富士男の「絞りまくり」。また事故で早くにレースから去った北方正孝の破壊力に溢れたまくりは、今や九州の中高年ファンの伝説になった。

差しの名手には、ニックネームが付いて回った。松野寛は「マツカン差し」、近藤幸男は「差しコン」、今林伸正は「差しバヤシ」。SGクラスでは、福永達夫の左隣コースのまくりに乗ったマーク差しが絶品だった。

史上最高のスタート王・瀬尾

ボートレースといえば、やっぱりスタートが華。スタートの果敢な選手は、成績以上にファンの人気も高かった。南公・貴田宏一・岩口昭三・井上利明らは、平均STが0.25という時代に0.17前後が普通だった。「フライングを怖れぬスタート野郎」というキャラクターなら、昨年惜しまれて引退した上島久男と現役の兼島敏弘が双璧か。純粋なスタートの天才といえば、これはもう瀬尾達也以外にいない。どんな制度・条件に変わっても、常にトップスタートで行けるのだから…。

“佐賀のキャノン砲”大外一本を貫いた向義行

極端な伸び型にする選手は昔からいたが、必ずしもアウト屋だけではなかった。吉田重義などはインやセンターでも、チルトをハネた上にライナーを積んでいた。

整備の名手と謳われたのは、ギヤケースの小澤成吉、プロペラの松本進、ピストンの倉尾良一ら。部品名までプラスされて呼ばれたように、職人肌の選手が多い。“ジェット”大平浩士、スーパーピット離れの西田靖らも忘れてはならないだろう。

枠なり進入が定着する前は、コース争いの上手い・下手がモノをいった。イン争いは当然ながら、カド取りも見応えがあり、中でも渡辺義則の巧みさはこの上なかった。

ダンプは賛否両論あれど、ファンを沸かせたことは事実。闘志むき出しの小林嗣政をはじめ、ニックネームもそのまま“ダンプ”浅見敏夫、“ガッツ”玉生正人らが登場すると、ファンも何かやってくれそうと期待したものである。

モンキーターンを世に出した飯田加一

記録よりも記憶に残るレーサーの代表、植木通彦

●強烈な個性派選手・その1(戦法編)

戦法など	登番	選手名	出身	エピソード・その他
インの鬼	1481	柴田　稔	静岡	ニックネームは「鬼バタ」
	2569	西島洋一	兵庫	枠なり時代でも9割イン!
アウト専科	2327	向　義行	佐賀	ほぼ大外のみで1500勝
	2964	吉岡　修	山口	記念でも“わが道”の走り
まくり	2717	津田富士男	大阪	絞りまくりの代名詞的存在
	2875	北方正孝	佐賀	事故さえなければ…
差し	1592	松野　寛	静岡	“マツカン差し”で大仕事
	2205	福永達夫	山口	マーク差しは天下一品!
スタート野郎	2447	上島久男	愛知	Fを94本切ってもメゲず
	2942	瀬尾達也	徳島	天才ロケットスターター
極端な伸び型仕様	2417	小畑健策	福岡	往年の「チルト3の男」
	2288	吉田重義	大阪	ライナーを目一杯積んで
整備の名手	1370	小澤成吉	愛知	自主整備導入で蘇った
	1738	松本　進	愛知	プロペラにいち早く注目
カド取り名人	2325	渡辺義則	宮崎	巧みに自分をカドにする
ダンプ	1596	小林嗣政	山口	“関門の虎”が牙をむく!

●強烈な個性派選手・その2(バラエティ編)

キャラクター	登番	選手名	出身	エピソード・その他
軽量級	2289	上船俊一	奈良	あまりに出るので“トビ船”と
	3165	平岡君江	千葉	35kgを割ることもあった!?
重量級	2014	高塚清一	静岡	スタートでハンデをカバー
	2090	黒明良光	岡山	レースの迫力は艇史に残る
地元“天皇”	1203	松尾泰宏	佐賀	唐津周年は3連覇を含めV7
	2502	松田雅文	福岡	“博多ん大将”といえばこの人
一般戦の鬼	2276	古谷　猛	岡山	一般戦だけで75回の優勝
	1644	吉田清志	岡山	全国24場の一般戦で優勝
無冠の帝王	2528	新井敏司	栃木	GIは19回も制した関東の雄
	2833	荘林幸輝	熊本	SG優出19回も頂点に届かず
優出王	2819	足立保孝	大阪	76回目の優出で悲願のV!
波浪水面の鬼	3054	北川幸典	広島	風・波が出ることを祈願!?
遅攻派	1897	石塚憲明	静岡	Fのきで2回記念を手にした
モンキーターンの祖	2679	飯田加一	東京	ターン革命を起こした異端児
異形のターン	2170	古川文雄	佐賀	長身を折りたたむ独自の旋回
ランナ王	2449	木下青海	佐賀	腕っぷしが強く豪快なシャクリ

印象深い向義行の引退パーティー

喜多條忠(作詞家)

ボートレース殿堂選考委員でもある喜多條氏は、個性派3人の名を挙げてこう語ってくれた。「インのセキチュウ(関忠志)。F2で01の逃げを見せられたらグウの音も出なかったね。兼島敏弘もF3でまくったりと気風が良かった。全国を追いかけて舟券を買った。軽かったのでひとまくりが多かったね。

面白かったのは向義行の引退記念パーティーのこと。同期の野中(和夫)らに加えて、九州の名だたる選手も皆来ていた。『お前、こんなに人気があったのか?』と聞いたら、『だってオレは、コース取りで誰にも迷惑をかけなかったからな』と。6コースで1500勝は凄い!　性格は豪快そのものだった」

奇抜なターンが目を引いた長身の古川文雄

廃止されたランナの走りを披露する木下青海

体重制限で悲喜こもごも

続いて、ユニークなキャラクターであったり、バラエティ色にも溢れた選手たちを探っていこう。

88年、昭和の最後に実施された最低体重制。この前までは、軽量級選手にとっては天国で、重量級選手のハンデは大きく、トップ選手は過酷な減量合戦を強いられた。

軽量級で名を知られたのが、上船俊一・吉田雅壽・半田幸男ら。40kg台前半で乗れるのだから、エンジンはケタ違いに出た。女子はさらに軽く、平岡君江などは148㎝しかなかったので、30kg台前半とも噂された。

重量級の対抗策は、際どいスタート、一か八かのターン、エンジン出しを求めての整備力アップ。一時復活したランナ戦へのあっせんを希望する選手もいた。黒明良光はその豪快なターンでスターとなったが、その反動でFや転覆事故も多かった。

地元の水面で格段に強さを発揮する選手も、今よりずっと多かった。どの場にも“大将”とか“天皇”と呼ばれる主がいたもの。唐津の松尾泰宏、福岡の松田雅文、鳴門の中道善博、琵琶湖の野崎進、宮島の矢尾一豊らは、地元ファンへの貢献度は抜群だった。その後の世代になる戸田の池上裕次、琵琶湖の山田豊らもこの列に加えていいだろう。

記念には縁がなくても、ひたすら一般戦で優勝を重ねた選手も少なくなかった。『競艇王国』と呼ばれ、記念選手が溢れていた岡山にとくに多く、石田栄章・吉田清志・武田章・古谷猛らがその典型で、万谷章もそのひとりだった。

個性派の頂点・飯田加一

SGの“名脇役”であり、“無冠の帝王”と呼ばれる選手も何人かいる。表中の新井敏司と荘林幸輝はあまりに有名だが、他では古賀武日児・角川政志・桑原淳一らか。長嶺豊もこの仲間入りをしそうだったが、50歳のダービーVで大仕事を成し遂げた。

さらに一般戦クラスになると、もはや不思議とさえいえる記録の持ち主もいた。代表例が足立保孝ではなかったか。初優勝まで優出が76回を数えたというのは珍記録ともいえる。

荒れ水面は嫌いという選手がほとんどのはずだが、中には『風波乞い』をしていると噂の選手もいる。北川幸典がその人だ。昔は消波装置や防風壁がなくて、荒れ水面になるレース場も多く、星野幸正・大岩章・岩口昭三・島也茂らも荒天巧者として名が通っていた。

個性派に勲章をあげるなら、それに最もふさわしいのは飯田加一だろう。モンキーターンを生んだというだけで、長い説明は不要だろう。そのモンキーとも少し違うが、古川文雄は独特のターンで異彩を放っていた。長身で重量級でもあったので、体重移動については常に考えていたという。

そして最後に挙げておきたいのは、今は廃止されてしまったランナバウトの艇王・木下青海。今となってはあの豪快なシャクリが懐かしい。

50歳で初のSG制覇、ファンも涙した長嶺豊